

副作用の臨床推論と未然回避

臨床薬学センター 八重徹司

副作用には、予測不可能な副作用と、理論的に予測し未然に回避できるタイプの副作用があります。副作用を理論的に予測できるケースでは、患者さんへ薬剤が投与される前の段階（疑義照会や医師とのカンファレンスなど）で回避します。患者さんへ薬剤が投与された後では、病棟の看護師さんの協力（24 時間モニタリング）を得ながら、副作用が重篤化する前に回避することが理想となります。その結果として、患者さんに対しては、安全で安心な薬物療法を提供することが可能となります。

副作用の未然回避はリスクマネジメント（薬物療法に関連する医療事故や医療ミスの防止）に直結することから、病院における医療安全管理者（責任者）として薬剤師が大きな役割を担うことになります。また、不適切投与の回避は、病院の収益面のマイナス要因改善にも直接貢献することができるため、病院長や事務局長など経営陣の大きな関心事となり、薬剤師の雇用推進にもつながることになります。

副作用の未然回避が重要であることは明らかなですが、一方で『未然に回避しているため、薬剤師の介入が病院経営サイドに伝わり難い』といった状況に陥ることになります。本日のセミナーでは、病院薬剤師時代に取り組んだ副作用の未然回避に関する臨床研究やシミュレーション研究を紹介します。また、薬剤師の介入を『見える化』するための取り組みについても紹介し、大学における研究へのつながりについて触れたいと思います。